

文化芸術マスタープラン（案） パブリックコメント概要説明会 質疑応答内容

◎参加者

市民アンケート・団体アンケート・アイデア募集を行っているが、保育園、小学校の教諭に対する希望の聞き取りはどのようにしているか。

事務局

子どもは0-18歳までであるが、特定の年代や特定の対象者へのヒアリングはしていない。ただし、市役所の中では文化力の活用ということで、担当部署とは調整会議を行っている。福祉については、子育て支援課とは直接は話をしていないが、福祉のとりまとめをしている福祉施策課、教育委員会は教育総務課など、間接的ではあるが聞いている。特に保育園や幼稚園などを対象としたヒアリングは行っていない。

◎参加者

文化芸術に携わっている人間だが、芸術の有数の大学として県芸は知っていても、学生の頃から長久手市との距離感を感じていた。創造スタッフなど一生懸命やっているが、長久手市との距離が遠すぎる。

一つ気になったのは、“長久手クオリティ”で、長久手市が文化文化というのは嬉しいが、特徴が感じられない。ものすごく素晴らしい方を時々呼んでいるけど、一般市民には届いていない。長久手クオリティは大事だが、何をもって長久手クオリティとするのか。より市民から距離が遠くなっては良くない。

子どもの頃から育てるのはもちろん大事だが、子どもといえば親。親が文化芸術を知らない人生を歩んできたなら、継続できるかの問題がある。核家族で、親も生活するだけで精一杯。どういったことで長久手クオリティを掲げていくのか。もう少し深くお聞きしたい。

事務局

県芸は50周年で、人口の1パーセントが芸術家で登録されているが、おそらくその大半が県芸の卒業生が長久手に住みついたからである。文化の家ができた一つの役割として、市民と芸術家の架け橋になることであり、第1次マスタープランの大前提であった。どう繋いでいくのか試行錯誤してきた。数としてはたくさんやってきたが、話を聞いてつくづく思うのは、発信力。やっていることが市民に伝わらない。伝わり方が問題であり、ずっと悩んできたところである。文化の家がやってきたことは全国の劇場から見て、自治体の文化行政としては高い評価をうけているが、そのことすら知られていないし、クオリティ自体も自信をもってやってきたが、そのことすら伝わらないという点で、どんなにクオリティが高くても伝わらなければ意味がないので、今後の展開としてはそれをどう伝えていくか、研究していくのが非常に重要である。常々の悩みとしては、オペラに力をいれてきたが、関心のある層と関心のない層にギャップが出た。ギャップをどう埋めるのか。子

供向けのニーズは高いが、だからといって子供目線にせず、いかにしてクオリティを維持したままそれを提供していくか。開かれた劇場でありつつ、質の維持をいかにしていくか。

事務局

質が本当にいいかどうかは多様な経験を数多く経験しないと分からない。小学校・中学校全生徒に直に芸術に触れてもらうため、10数年間であーとという形で小中学校をすべてまわっているが、そこで体験したことで、この先生徒がどこまで芸術に触れていくかどうか、というのはまだ10数年なので目に見えない部分ではあるが、今後もそういった活動を続け、なるべく芸術に触れる機会は設けていきたい。来年度のアクションプランでこれから足りない部分をどう補っていくか。

◎参加者

文化芸術を活かしたまちづくりについて、いいまちとはどんなまちか。そのイメージが共通で認識しているところへ向かっているか。常日頃目に見えるまちの姿とか、川の流れとかまちづくりという言葉の中に具体的にどんなイメージをもっているか。アーティストが街中に作品を展示するのもよいが、それが芸術と本当に言えるのか。それが環境とどのようにフィットするのか、居心地のよい空間になっているか、そういった尺度があることが大事。

県芸の教育についてずっと感じているのは、例えば、こちらで言うフランチャイズアーティスト。芸大ではアーティストレジデンスとしてアーティストを招いて1-2週間滞在してやってもらっている。共催という形で芸大と長久手市が一緒になってアーティストを育てる。普段目に見えるまちの姿が、きもちのいい街であれば、アーティストが来るのではないか。

事務局

今日はパブリックコメント概要説明会を実施し、私どもが説明したが、実際にはこの計画自体は行政のみで作ったものではない。短い時間で何度も議論する中で、重点施策やキーワードが出てきて、アンケート、アイデア募集など、こんなにあたたかいご支援をいただけて感謝申し上げたい。また交流会のときに皆さんに意見交換していただきたいが、こういった意見が市民から出る、ということが長久手のクオリティだと思う。市内には4大学あり、芸大のみをフィーチャーすることは難しい。長久手の近隣には10を超える大学があり、最近の名芸や、情報に関しては南山の先生など協力して学生たちに色々やってもらっている。学生が1万人くらいいるということで、そういう人材も特殊である。

長久手のまちづくりの方向性の中で、マスタープランは文化という一つの側面からのアプローチであるが、色々なアプローチがある。例えば、議論の中で、景観、子育て、福祉などの言葉が出たがこれらが絡み合っただけでまちはできていく気がする。近隣では人口が減っており高齢化率も進む状況にある市もある。それに相対すると、長久手は1-2,000人単位で転出入があり、全国の自治体の中でも珍しい。人口が増えていて、まちの形成もまだまだこれからという、若いまち。まちを形づくっていくのは、行政のみならず、市民の皆さんの力、それからそこにある芸大や古戦場、伝統文化といった文化資源であり、文化資源が多いことが長久手のいいところである。

今やろうとしているまちづくりは、日本一の福祉のまちではあるが、福祉も一元的な福祉ではなく

文化、環境、自然などの色々な資源を活用したなかで、市民、行政、大学生が楽しめるまちにするという形だと思う。これは、ぜひ皆さんで考えていただきたい。意を強くしたのは、結局まちづくりには行政のみならず、市民のみなさん、今回検討会議にも若い参加者がいたが、そういった人たちと手を携えればそんなに暗闇になることはないということ。ぜひこの計画も読んでいただき、またご意見をいただければ。

◎参加者

私は長久手の原住民で、これから歴史と文化の二本柱かなと言い続けている。
マスタープランの中の希望としては、海外に行く注目されるのがアニメ的な文化。海外の人が興味をもつ。ジブリパークが進められているが、あれもアニメから発信している。それを取り入れても、もう少し長久手のクオリティも出るのでは。県芸でアニメーションをやる人は少ないのかもしれないが。

事務局

アニメの分野は当然、文化であり芸術。当然そういったところも視野に入れながらやっていく。